

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 山口 俊雄

本論文は石川淳の文壇デビューから終戦直後にいたるまでの代表作十二編を対象に、特に戦時体制への批判意識という観点から、これらを統一的に論じたものである。

構成は四部からなる。まず初期の代表作を取り上げた第一部においては、デビュー作である「佳人」に禅の「十牛図」、芥川賞受賞作である「普賢」に仏教の相即論の反映を見、そこに同時代の知識人の「知」のあり方への批判や、現実認識のあらたな可能性を見出している。

第二部は戦時下の作品を通して時流への抵抗の様態を論ずることを目的としているが、このうち「履霜」論は、イブセンの「人形の家」のパロディとしてこの小説を捉え、これまで肯定的に捉えられがちであった男性主人公の生き方への批判を読んでいる点が注目される。また、「マルスの歌」論においては、国家総動員法の大衆心理が擬似的な「自然」への信仰に基づいている事実が指摘されており、それに対する作者の批評精神を指摘している点も「抵抗」のあり方を問う上で傾聴に値する。

第三部においては戦時下の詩歌と散文、古典文学との関係が論じられているが、従来あまり取り上げられなかったエッセイ、「祈祷と祝詞と散文」に着目し、同時代のシャルル・ペギーの受容のあり方への石川淳の批判意識が論じられている。これは同じくアランの反戦思想への石川淳の理解の質を検証した「マルスの歌」論と共に、比較文化、比較文学的な広がりを持つ成果として注目されるものである。また戦中から戦後の問題点を論じた第四部においても、「焼跡のイエス」に天皇の人間宣言への風刺を読むなど、多くの知見が含まれている。

このように同時代の諸言説、先行テキストや話形との有機的な関係を実証的に検証することによって、これまで孤高の作家とされてきた石川淳に関し、あらためて時代状況との有機的な関係を明らかにし得た点に本論の大きな長が認められる。総じて内外の先行作品との関係の実証に筆が割かれる分、作品自体の文体分析が手薄になる傾向が一部に見られるが、時局への批判を重層的に解釈していくその手法は、この時期の文学作品の研究手法に新たな問題提起をなすものとして高く評価することができる。

以上の点から、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。